新交響楽団
第94回演奏会

指揮
芥川也寸志

1981年11月29日(日) 2時

東京文化会館

パッサカリアのこと　　菅原明朗

今年の春、新交響楽団がわたくしの作品の演奏をして下さったそのお礼に、この曲を編曲しました。

パッサカリアの管弦楽の為の編曲は、先達の何人かが、手を着け、それが演奏されているのにかかわらず、わたくしが敢えてこの仕事に手を着けたのは、次の2つの理由によります。

1．この曲の演奏から受ける感銘は、ゴシックの聖堂の内部に入った時の様な壮大なものです。ところが、オルガンの名手だったバッハが、この仕事の時に弾いていたオルガンは、それ程大きくない、むしろ小さなオルガンでした。表現の手段と、その結果を混同して、先達等は全部、三管、四管の大編成の管弦楽に編作しています。

2．バッハは、この曲を原則的に四声のポリフォニーで作り上げているのです。ところが、その響きの豊かさから先達等は、響きの濃淡を和声的に附加しています。

わたくしはこの2つの誤りを先輩達に指南されて、敢えてこの仕事に手を着けたのです。

この仕事は、新交響楽団の楽員方に理解されました。わたくしの喜びが、また一つふえた訳です。

チェンバロの為のゴールドベルヒ、ヴァイオリンの為のシャコンヌ、そうしてオルガンの為のパッサカリア、この3つはバッハの生涯の3大変奏曲であります。次の世代の変奏曲の手法に、一番関連のあるのはシャコンヌですが、わたくしが一番興味を持つのはパッサカリアでした。20の変奏曲と最後のフーガの一連との対照には、興趣のつきないものがあります。スゥィング、ポリトナリティー、ポリトミー、現在の作曲家　使う全手法が使われていますが、声部を重視しないかぎりこの魅力は表現出来ないのです。

楽器編成

Picc (Fl Ⅲ), 2Fl, 2Ob, 2Cl, 2Fg, 4Cor,
2Tp, 3Tb, Tuba, Timpani, Cassa rolante,
Archi.

J.S. BACH-M.SOEGAHARAT PASSACAGLIA PER ORGANO

新交響楽団

新交響楽団は1956年3月創立、主婦、学生及び様々な職業を持つ社会人から構成されている。

創立以来、音楽監督芥川也寸志の献身的な指導のもとに、ソビエト演奏旅行の他、九州・沖縄等の国内演奏旅行、ベートーベンチクルス、ストラビンスキー3部作一挙上演等を行った。

1976年には創立20周年記念として「日本の交響作品展」と名付けた2夜にわたる演奏会により、「芥川也寸志と新交響楽団」は第8回サントリー音楽賞を受賞。

テーマ《宮殿前広場》

① 

悪のモチーフ1.（ティンパニーのレシタチーフ）

② 

悪のモチーフ2.（軍隊の信号ラッパ）

③ 

革命歌（囚人歌）《聞いてくれ！》

④ 

革命歌（囚人歌）《夜は暗い》

⑤ 

第2楽章の導入的モチーフ

⑥ 

合唱曲「1月9日」から《おお皇帝、われらが父よ》（「十の詩曲」より）

⑦ 

合唱曲「1月9日」から《帽子をぬごう》（「十の詩曲」より）ライトモチーフ

⑧ 

革命歌《君は英雄的にたおれた》（同志はたおれぬ）

⑨ 

革命歌《こんにちは、自由よ》

⑩ 

革命歌《圧制者らよ、激怒せよ》

⑪ 

革命歌《ワルシャヴャンカ》（ワルシャワ労働歌）

⑫ 

Мне доставляет большое удовольствие обратиться с настоящим приветствием ко всем участникам симфонического оркестра "Синкокёгакудан".

Этот оркестр принадлежит к числу известных самодеятельных музыкальных коллективов Японии, которые благодаря высокому исполнительскому мастерству снискали заслуженное признание у любителей классической музыки. Очень приятно, что ныне в репертуар оркестра вошли произведения замечательного советского композитора Д.Шостаковича.

От всего сердца желаю оркестру творческих успехов и выражаю надежду, что он своей деятельностью будет и впредь служить благородному делу развития культурного сотрудничества и укрепления взаимопонимания между народами Советского Союза и Японии.

14- ноября 1981 года

ПОСОЛ СССР В ЯПОНИИ
Д.С.ПОЛЯНСКИЙ

"新交響楽団"のすべての皆様へ心から挨拶申しあげることは、私にとって大きな喜びであります。

このオーケストラは、日本の著名なアマチュア音楽集団の一つで、その高い演奏技術によってクラシック音楽愛好家から高く評価されております。今回、オーケストラのレパートリーの中にソビエトの著名な作曲家D．ショスタコーヴィチの作品が加えられたことは、大変嬉しいことです。

心からオーケストラの創造活動の成功を祈ると同時に、その活動によってソビエトと日本の民族間の文化的協力の発展と相互理解の強化という高潔な仕事に前進的に貢献されることを願っております。

14／XI　1981年　　在日ソビエト大使
D．S．ポリャンスキー

解説　寺原伸夫

ドミトリー・ショスタコーヴィチの第11交響曲《1905年》は、10月社会主義革命40周年に当る1957年に作曲されている。1906年生れのショスタコーヴィチ51才の作品である。ところで、ちようどこの年、今日の指揮者芥川也寸志氏が日本の作曲家として初めてソビエトを訪れ、ショスタコーヴィチと対談しているのは興味深い。対談の中で、当然のことながらショスタコーヴィチは「新しい11番目の交響曲を出来れば夏までに書きあげます。これは1905年の革命のうたが主題になっています。」と語っていて、この強烈な芸術的個性をもった天才作曲家の印象とともに、この曲は芥川氏にとって感慨深いものであろう。

交響曲の標題となっている《1905年》という年は、どのような年なのか。作品を理解するために、多少、歴史的考案を加える必要がある。1905年はその前年に始まった日露戦争が終結した年である。開戦直後の1時的な愛国的興奮もつかの間、あいつぐ敗戦と戦費の負担が国内情勢を悪化させる。1905年初頭、4人の解雇に端を発したストライキを契機に、1月9日の日曜日、数万、一説には数10万といわれる労働者とその家族が、ロシア皇帝の居所《冬宮殿》に向って正義と保護を求めて請願行進をする。その全く無防備な民衆に、皇帝の軍隊が突如として一斉射撃を加え、数千人を死傷させるという傷ましい事件が起った。この歴史的な事件が、第11交響曲の中心テーマなのである。これがきっかけとなって、ロシア各都市の労働者が抵抗に立ちあがり、エイゼンシュテインの映画でもよく知られた《戦艦ポチョムキン》の反乱も起る。これらを総括してロシア第1次革命と呼ばれているが、結果としては失敗に終る。しかし、これを機に組織されたソビエト（労働者・兵士・農民会議）を基盤に、レーニンのひきいるボルシェヴィキの指導によって、1917年にロシア社会主義革命が達成される訳である。

この第1次ロシア革命のテーマは、かなり以前からショスタコーヴィチの心を深く捉えていたようである。彼は1951年に作曲した革命詩人の詩による合唱連曲《十の詩曲》の中で、このテーマを取りあげている。この中の1曲《1月9日》から2つのテーマを、《1905年》交響曲の重要なモチーフとして使用している。

第11交響曲の特徴をいくつか指適しておきたい。まず第一にこの曲が、《宣言された》プログラムをもつ、ショスタコーヴィチの最初の交響曲であることだ。シンフォニー全体の標題だけでなく、4つの楽章にもそれぞれ名前がつけられている。



ショスタコーヴィチ氏のポートレート

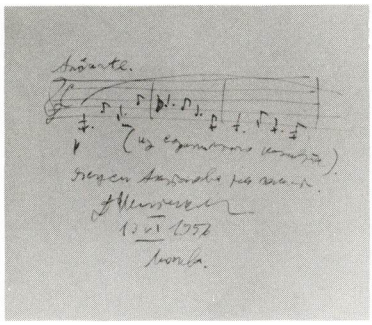
そして、交響曲の音楽がそのプログラムの思想を卓越した芸術力で再現していることである。ショスタコーヴィチがこれまで書いた作品の中で、革命的な斗いの中で抑圧され、そして高揚していく民衆の姿をこれほどまで見事に描いた作品は一つもなかった。この交響曲では民衆が主人公である。

特に興味深いのはショスタコーヴィチが革命歌を利用していることである。完成の前年、ショスタコーヴィチは雑誌《ソビエト音楽》に次のように書いている。

「私はわが祖国の歴史の中で、労働者の革命歌が鮮明に投影している、1905年の歴史的ピリオドをとても愛している。そういった革命歌を第11交響曲の中で使うかどうか、まだ決めていないが、音楽語ははっきり、これら革命歌の性格に近いものとなるだろう。」

結局のところ、ショスタコーヴィチは前掲の譜例のように、6つの革命歌を用いている。その引用の仕方はさまざまで、時には革命歌のメロディー全部を一度単純な表現で用いたあとで、二度目は広く展開し転調させている。例えば、1楽章の《聞いてくれ！》や3楽章の《同志はたおれぬ》がそうである。別の場合、例えばフィナーレの中の《圧制者らよ、激怒せよ》と《ワルシャワ労働歌》のように、単に歌い出しのフレーズや抑揚を引用し、発展させている場合もある。

標題とポピュラーな革命歌などの引用で近づき易い作品となっているが、ショスタコーヴィチの個性的な作風は少しも失われてはいない。初演は、モスクワではN・ラフリン指揮で1957年10月30日に、レニングラードではE・ムラヴィンスキーの指揮で同じ年の11月3日に行われた。1958年、この交響曲にレーニン賞が授与されている。全楽章は切れ目なしに演奏される。



芥川也寸志氏にあてたショスタコーヴィチ氏のサイン

第1楽章――《宮殿前広場》（アダージョ・ト短調）

独立した楽章にまで拡大されているが、性格としては第2楽章への導入部といえる。

第1部はハープのコード演奏をバックに、弱音器をつけた弦楽器群の奏する《宮殿前広場》のテーマ（譜例①）で始まる。《悪》のモチーフとでも言うべきティンパニーのレシタチーフ（譜例②）と、不吉な軍隊の信号ラッパ（譜例③）をもった《宮殿前広場》は、このシンフォニーの主要なテーマの一つで、人気のない広場の冷ややかさ、ロシア帝政の砦であった冬宮殿の陰うつさを卓越した芸術力で再現している。このテーマはくり返された後で変形され、抑圧された民衆の奴隷的忍従のシンボルである教会聖歌の祈りの抑揚をにじませている。

中間部では、ティンパニーの3連符のリズムであらかじめ準備された革命歌（囚人歌）《聞いてくれ！》（譜例④）が現われる。導入部の重々しさと対称的な抒情的革命歌の見事な旋律を、2つのフルートが奏する。

真実が裏切られ、良心が苦しめられたかのように
秋の夜は暗い……
夜のしじまのなかで　時折り
うめきか　緩慢に　物悲しげに響く
――聞いてくれ！

《宮殿前広場》のテーマをはさんで、《聞いてくれ！》の心おののく歌が、より一層の鮮明さと緊張をもって旋律的頂点を形づくりながらくり返される。そこでは《悪》のリズムを小太鼓に叩いて、緊張感を盛りあげている。続いて、《聞いてくれ！》の最後のリズム的なオスティナートをバックに、今一つの革命歌（同じく囚人歌）《夜は暗い》（譜例⑤）が現われる。この巾広い抒情的施律は、はじめチェロとコントラバスが、2度目には高音域の木管が奏する。

重々しく、一層こわばったようなライトテーマ《宮殿前広場》で、第1楽章を縁どりながら、切れ目なしに第2楽章へと移行する。

第2楽章――《1月9日》（アレグロ・ト短調）

「血の日曜日」の一大悲劇を、極限の具象性をもって再現した、交響曲全体の中心的な楽章である。形式としては、極めて自由に書かれた「ソナタ・アレグロ」と言える。

低音弦楽器の奏する不安に満ちた《旋回する》導入的モチーフ譜例⑥は、拡がりをもった民衆の哀歌《おお、皇帝われらが父よ》（譜例⑦）を導きだす。このテーマの旋律線は、導入部のモチーフに似ているが、リズムは引き伸ばされている。これはショスタコーヴィチの同名の合唱曲（合唱連曲「十の詩曲」第6曲）から引用されたもので、第2楽章の主要テーマである。

おお　お前　皇帝　われらの父よ！
周りを見渡してくれ
皇帝の下僕のために　おれたちは
安楽な暮しも　金もない

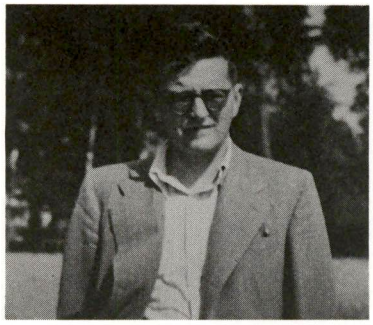
主要テーマが展開され、クライマックスに近づいていく中で、第1楽章の信号ラッパのファンファーレが加えられている。クライマックスの後で緊張とダイナミズムは急速に減少して、民衆の哀歌的テーマ《帽子をぬごう》（合唱曲「1月9日」より、譜例⑧）が金管の合奏で響く。このテーマは交響曲の最も重要なライトモチーフであり、このあと全楽章にわたって、さまざまな形をとりながら現われる。

再び、テーマ《おお皇帝われらが父よ》に戻るが、新しい調（変ロ短調）で、しかもバイオリンが3度音程を弱音で演奏しているので、女声による哀歌を思わせるような物悲しさで響く。その先、一定しない調性や、変化しやすいリズム（$\frac{5}{8}$拍子も現われる）による緊張した対位法的発展が、再び強力なクライマックスを形づくるが、それは一度目より一層鮮明である。しかも、前述した《帽子をぬごう》のテーマを、ホルンが高音域で悲劇的に三度、強奏して提示部を完結する。

この提示部の音楽は巨大な群衆の吐息をおののくように伝えている。それは、人々の声、叫び、祈り、うめきや泣き声である。テーマは、あるときは哀れみをこうように物悲しげに（副主題提示部）あるときは怒りや抗議の感情（クライマックス）をみなぎらせながら響く。

突然、すべてが静まりかえる。再び、第1楽章のテーマ《宮殿前広場》が聞える。請願行進はその目的を果すために、冬宮殿の前に止まる。そして、小太鼓の鋭い乱打。無防備な労働者とその妻や子どもに対する一斉射撃の悲惨な光景である。この部分は長大なフーガートで描かれ、イントネーションは第1章のモチーフ《悪》（譜例②）が変形されている。緊迫の度を加えながら展開されるフーガートの響きは、民衆の狼狽とパニック的恐怖の悲劇を描出しながら、クライマックスへ向って突進する。作曲家は時折、オーケストラのトウッティを中断して、暴圧と迫害の不吉なテーマをフォルティシモで打楽器群に演奏させる。最後に、オーケストラは最強の強さと増幅したリズムで、悲劇的テーマ《帽子をぬごう》を引用しながら、真正の悲哀と不幸を歌いあげる。

オーケストラの強大な響きが、突如として死の静寂にとってかわる。かすかに《宮殿前広場》のテーマが



ショスタコーヴィチ氏のポートレート 1946年モスクワ（シュネールソン氏提供）

弱音器をつけた弦群のおののくようなトレモロ演奏で聞えてくる。第1楽章の革命歌《聞いてくれ》の断片もかすかに響く。ティンパニーのうめくようなイントネーションを残しながら、第3楽章へと移行する。

第3楽章――《永遠の記憶》（アダージョ・ト短調）

この楽章はレクイエムか、葬送行進曲を思わせる。ショスタコーヴィチは革命歌《君は英雄的にたおれた》（譜例⑨）を主題として引用しながら、1月9日の事件後の全民衆の嘆きと悲しみを再現している。レーニンも愛唱したと言われるこの歌は、日本では《同志はたおれぬ》という題で知られている。その厳粛な旋律を、1度目は弱音器をつけたビオラが完全な姿で演奏するが、その際のチェロとコントラバスのピッチカートは、第1楽章のテーマ《悪》のイントネーションを思わせる。2度目は弦5重奏の形をとりながら、自由に展開される。

中間部では、金管楽器群による重たい和音が陰うつな色調を助成し、木管と弦が革命歌の断片を奏する。続いて金管群の響きと交替した弦群が、情緒に富んだ明るい色調で革命歌《こんにちは、自由よ》（譜例⑩）を歌う。ショスタコーヴィチはこの歌のイントネーションを自由に変形させながら、明るく喜びに溢れた交響的讃歌に創りかえている。それは再び高揚して、クライマックスではテーマ《帽子をぬごう》（譜例⑧）が、あたかも血の日曜日の犠牲に対する復讐への呼び声のように響きわたる。

続いて、ティンパニーとトランペットの同音による轟くようなレシタチーフをバックに最初のテーマに戻るが、死と悲しみをのりこえて進む決意を歌うかのように、自由に変奏されている。チェロとコントラバスのピッチカートが途絶えようとする瞬間に、第4楽章に突入する。

第4楽章――《警鐘》（アレグロ　ノントロッポ、ロ短調――ト短調）

フィナーレ・アレグロは、革命歌《圧制者らよ、激怒せよ》（譜例⑪）の冒頭の一節で始まる。低音域の木管金管が確信に満ちて強奏する。

圧制者らよ激怒せよ　われらを愚弄せよ
牢獄や足かせもて　残忍に威嚇せよ
わが体は　たとえ踏みにじられようと
わが心は　はがねのように強い

この革命歌のイントネーションと鋭いリズムによる交響的発展は、燃えあがる革命の炎を思わせる。クライマックスに到達する瞬間に、斗いの爆発音を轟かせながら、ホルンとトランペットがはりつめた音でライトモチーフ《帽子をぬごう》を歌う。

第2部の革命歌《ワルシャヴャンカ》（譜例⑫）の出現は、大群衆によるデモンストレーションを彷彿とさせる。この歌も「ワルシャワ労働歌」と題されて、日本に紹介されている。テーマとしては、その冒頭だけが変形なしで使われているだけで、旋律的展開は作曲家によって自由に行われている。このあと、トランペットが長調の行進曲を奏する。これはG・スヴィリードフ作曲のオペレッタ「ともしび」の中の歌《雷鳴の夜はなぜにつらい》（譜例⑬）が一時的に挿入される。

反覆部では、トランペットの奏する《悪》のファンファーレ（譜例③）を合図に、引き伸ばされたリズムで、フィナーレ冒頭のテーマ（譜例⑪）が、今度はその全貌を現わす。展開の中で、譜例⑬や譜例⑫のテーマをくり返し挿入しながら、フィナーレのクライマックスの一つであるモデラート$\frac{3}{4}$拍子に到達する。極限の強烈な音響と断呼としたイントネーションで、テーマ《おお皇帝われらが父よ》（譜例⑦）が響く。続いて、《圧制者らよ激怒せよ》の終結部のフレーズ「恥辱、恥辱、圧制者らに死を！」が宣言される。

コーダ的アダージョでは、静寂の中で第1次ロシア革命の失敗についての悲しい想い出が甦える。《宮殿前広場》のテーマをバックにイングリッシュ・ホルンが歌う人間味溢れる歌は、ライトモチーフ《帽子をぬごう》である。打楽器群のトレモロがその静けさを破り、バスクラリネットが第2楽章の導入的モチーフ（譜例⑥）で登場する。それが木管群に受けつがれる中で、ホルンがライトモチーフ《帽子をぬごう》をかなで、次第に高まるオーケストラのトゥッティから、将来の斗いへの志向を主張するかのように警鐘が響きわたる。

〈参考文献〉
ソビエト音楽史　モスクワ〈ムジカ〉出版社
ショスタコーヴィチ第11交響曲総譜　モスクワ国立音楽出版社
ショスタコーヴィチ「時と私」　モスクワ〈ソビエト作曲家〉出版社、（筆者が翻訳中）
ロシア史、岩間徹編、山川出版社

楽器編成

Picc（Fl Ⅲ）, 2Fl, 2Ob, Cor Ingl,
2Cl, Cl-basso（Cl Ⅲ）, 2Fg, Contra-fg（Fg Ⅲ）,
4Cor, 3Tp, 3Tb, Tuba, Timpani, Trgl,
Tamb Militare, Piatti, Gran Cassa, Tam-tam,
Silofono, Campana, Celesta, Arpa（2-4）, Archi.

——技術でお役立ち——

RICOH

世界初、ソーラバッテリー内蔵。
リコーの超高級一眼レフ、新登場。
オプトロニクスの先端をきる。

(オプティカル・エレクトロニクス)



写真は、XRリケノンレンズ
50㎜F1.4 ¥28,500を装着。

リコーの先進技術がなしとげた、カメラ革新です。

リコーは、超低消費電力回路や液晶によるファインダー表示などの技術開発によって、電気消費量を今までのカメラの1/50～1/100以下(当社比)に減量。そこで、太陽電池の補助電源導入に成功しました。これは、世界初。カメラの新しい時代をひらく、一眼レフの誕生です。

●光を電気に変える太陽電池を内蔵。突然の電池切れ、なし。●12の情報を、ファインダーに集中。液晶ディスプレーを採用しました。●シャッターはクォーツ制御。マニュアル露出時も高精度です。●ひとクラス上をいく機能と精度。プロ・ユースにも応える、各部メカ。

新発売

RICOH SOLAR BATTERY SYSTEM XR-S

標準価格●ボディ¥52,500／XRリケノン50㎜F1.7N ¥15,000／XRリケノン50㎜F2 ¥9,000／カメラケース ¥3,500

リコー 光学事業部 〒104 東京都中央区銀座6-14-6 ☎03(543)4191